

ふるさと吉富町

私たちが暮らす「吉富町」には、現在に至るまでの数々の歴史があります。そして、そこには現在の快適な生活のベースがあります。そんなふるさと吉富町について、いろいろな視点からご紹介していきます。



第20回 文明の灯火

駅舎イルミネーション

毎年12月から1月にかけて、町の玄関口であるJR吉富駅がきれいなイルミネーションで彩られます。商工会青年部と町が協力して飾り付けを行い、この期間、駅前はずっといつもと違う装いに様変わりします。ライトアップされた光景は、行き交う人々の目を楽しませ、厳しい冬の寒さを少しの間だけ忘れさせてくれそうです。

吉富町に電灯がともった日

このように、灯りはその場を華やかにし、ときに私たちの心を和ませるものとして活用されていますが、あまりにもその存在が当たり前になった今、本来の「暗がり」を照らす」という役割を、日頃どれだけの人が意識しているのでしょうか。

吉富町史（昭和58年発行）によると、中津発電所が開設されたお隣 中津の町では、早くも明治36年に電灯がついていたそうです。その後大正元年、築上郡内では最も早く、東吉富村に電灯がともることになりました。その当時は別府・楡生等は導入を見送ったようですが、別府の太田重雄氏を中心に、楡生の岡力松氏、友田福之助氏らがそれらの地区にも灯りをもたらすべく奔走した結果、大正12年12月、いよいよ町内全域に電灯がつくようになったのです。

夜の暗闇に初めて パッと明るい電灯がともされた光景を目にして、当時の人々は日々の暮らしにもたらされた文明の恩恵とこれから訪れるよりよい未来の予感に胸を膨らませていたのかもしれません。

防犯灯の普及と今

昭和の戦後になってもまだ暗い夜道は多く、防犯対策の一環として全国的に防犯灯の設置が進められてきました。吉富町でも地元地区の要望を受け、その数を急速に増やしていきました（10月31日現在で町内に約830灯を設置）。現在も町と各自治会で設置や維持管理を分担し、地域の安全・安心の確保に努めています。

一方、その普及が進み一定の安全が確保されるようになった近年、維持管理費の増大や地球温暖化対策、光害の影響など新たに考慮すべき問題も生じています。町ではこれらの課題に対応するため、LED灯への切り替えを進めたり、明暗のバランスを考慮して設置場所に一定の間隔を設けるなどの工夫を行っています。

皆さんの生活や周囲の景観、また地球環境にも配慮しながら、夜の安全・安心を守っていくことが大切なのですね。



夜を照らす防犯灯



防犯灯球替作業の様子